

書評 ローベル柊子著  
『ミラン・クンデラにおけるナルシスの悲喜劇』  
(成文社 2018年)

安 永 愛

「実存の幾何学者」一評者は、ミラン・クンデラ（1929～）のことを密かにそう名づけてきた。この作家の真面目とも不真面目ともつかない語りを引き込まれ、登場人物たちの悲喜劇をハラハラしながら見守るうち、浮かび上がってくるのは、人間という存在の、人間の形作る社会というものの、ある定理のようなものである。したたかな作家の眼光によって射られ、露わになるもの。しかし、それを「真実」と言ったのでは、この作家の悪魔的な眼差しと笑いの手に負えなさの印象とはすれ違ってしまう…

本書は、この何とも手に負えない小説家クンデラとその小説世界について、「ナルシズム」という誰しも免れない身近で厄介なテーマを切り口に、果敢に挑んだ研究書である。2013年5月にストラスブール大学大学院比較文学研究科に提出したフランス語の博士論文をベースに、大幅な改訂を施し、新たな研究成果と視点を加えたものだという。2014年にフランスで発表された最新作『無意味の祝祭』も含め、クンデラの小説作品全11作が組上に載せられている。

本書は二部構成となっており、第一部は「ナルシスたちの物語」と題され、クンデラの小説作品に現れる登場人物たちのナルシズムのありようが、執筆の年代順に分析されていく。第二部「小説家とナルシズム」では、クンデラの小説に特徴的な「作者的な語り手」に焦点が当てられ、共産主義下のチェコを去り、フランスに居を移し、チェコ語からフランス語に使用言語を変えることとなった越境作家の側面も含め、クンデラの小説家としてのアイデンティティ形成のプロセスが辿られる。

このシンプルな二部構成が、クンデラ作品の魅力とその淵源の解明に奏功している。本書はある種の現代アートのような瀟洒な佇まいの装丁とその手触りも魅力なのだが、表紙中央の少しアンティークがかかった白のフォトフレームに、クンデラのポートレート二枚が上下対称にポジとネガのような色合いで収まっている。この図が、いかにも二部構成の本書に似つかわしい。作り出された登

場人物と登場人物を作る作者と。本書を繙き、合わせ鏡のように見ていくことで、私たちは、クンデラ・ワールドと呼ぶほかないものの深奥へと誘われていくのである。

ローベル柊子の筆致には無駄がない。研究者が陥りがちな、文献学的探索の自己満足とは無縁であり、その視線は、インスタグラムの「いいね！」の数に一喜一憂する現代人の滑稽と悲哀を知り、クンデラ小説の中に幸せのありかを探ね、今を懸命に生きようとする、ありのままの人間のものである。詳細な注記も備え、文学史や文学理論も踏まえた歴とした学術的な書物でありながら、本書には、モンテーニュからロラン・バルトへと綿々と続く、モラリスト文学的な明察が散りばめられている。クンデラ作品自体にも劣らない、読み始めたら止まらなくなる圧倒的な吸引力のある語りなのである。まだ三十代の若さの著者の透徹した思考、胆力には驚かされる。

本書は、クンデラの研究書として優れたものであるが、研究者のみならず、広く一般読者に繙読を勧めたい。